

2021年4月23日

## 秋川流域住民の皆様へ 新型コロナウイルス感染拡大防止のメッセージ

公立阿伎留医療センター院長  
新型コロナウイルス感染症対策本部長  
荒川 泰行

### 新型コロナウイルス感染拡大・爆発に挑む社会的処方箋

新型コロナウイルスは、人、場所、時を選ばず感染しますが（ステルス感染）、「飛沫感染」と「接触感染」が主でありますので、その感染を防ぐ主体は個人であり、「飛沫」と「接触」が減るかどうかは個人の行動次第で決まります。この認識を共有して、社会の便益を考えた個人の衛生行動のより厳格な実践（行動変容）がウイルスの封じ込めに何よりも重要なことです。

こうも長くなると、日常生活のなかで“コロナ疲れ”や“コロナ慣れ”で意識低下に陥ることは否定できません。しかし、地域社会の新型コロナウイルスの感染拡大を防止する上で、誰一人として役割を持たない人はいません。

新型コロナウイルスの感染の予防・防止の切り札はワクチンではありますが、しかしその普及と集団免疫が追い付かない今こそ、市民の皆さん一人ひとりにもう一度気持ちを新たにして基本的な感染予防・防止対策に頑張る強い意志と行動力が求められます。

新型コロナウイルスと対峙して1年余りが経過しました。その間「新しい日常」への移行を促す行動変容と、「感染予防拡大警報」、「感染防止徹底宣言」、「感染拡大特別警報」、「緊急事態宣言」等のキーワードで感染拡大防止策への協力が様々な流行状況の変化の局面で呼びかけられてきました。

本年1月には新型コロナウイルス感染拡大第3波に対して2回目の「**緊急事態宣言**」とその延長措置が取られても、感染が収束するどころか、全国各地に飛び火してクラスターが多発し急速な感染拡大（リバウンド）とともに感染第4波が大きくなうねりとなって押し寄せてきています。政府は、3月に10都府県を対象に「**蔓延（まんえん）防止等重点措置**」を適用されました。こうして、新型コロナウイルスによる“**感染災害**”の新たな第4波への闘いが始まったばかりでした。しかし、感染拡大の勢いは全く収まりませんので、4月25日から3度目の「**緊急事態宣言**」が東京都、大阪府、京都府、兵庫県等4都府県を対象として発出されることになりましたので、まさしく、今その大嵐のまっただ中に突撃しようとしています。

また、医療提供体制の逼迫と社会経済活動の停滞・失速に直面するなか、特に従来株に比較して感染力が強く、かつ感染速度も速いとされる変異株(N501Y、N484K)の流行拡大への警戒と対策の強化が求められるようになりました。これまでの感染予防・防止対策への気の緩みに**赤信号**が灯るなか、予断を許さない最悪のステージが全国で始まっていることの危機感を持って徹底した取り組みが必要であります。

## 地域の感染拡大を防止するうえで

### 一人ひとりが自覚ある衛生行動をとることが最重要です

いくら言葉で「自粛・警戒」を呼びかけても、国民一人ひとりに響いて有効な感染対策が実行されなければ、ウイルスに“自分はどうつらない、他人にうつさない、周りに拡げない”という課題の解決には繋がりません。

感染拡大のリスクを抱えながら日常を暮らすには、ご自分はもちろん、大切な家族・友人などの身近な人や患者さん等の生命と健康を守り抜き、そして地域社会を守るために、原点に立ち返って家庭内、職場内、そして社会生活の行動において基本的、かつ標準的な感染予防・防止対策をしっかりと行って一日も早く新しい日常（常態）を取り戻すことです。

#### 原点に立ち返って

家庭内や職場での**基本的な感染予防対策**をしっかりと行いましょう！

- マスクの装着、□ 手洗いの励行、□ 3密・4密の回避、□ 食事の際は「黙食」「個食」、□ 定期的な換気の実施、□ 不要・不急の外出・旅行の回避（STAY HOME）□ 飲酒を伴う複数人数での宴席の中止、□ ドアノブ、スイッチ、リモコン、トイレや洗面台など、共有部分のこまめな消毒

ワクチン接種が広く行き渡って集団免疫が達成されるまでは、**トコトン!**  
『**STOP!!家族内感染**』 『**STOP!!病院内（施設内・事業所内）感染**』  
『**STOP!!地域内感染**』 を自分事の課題として受け止めて、我慢・辛抱で行動変容を以て対処することが最良の方策です。

新型コロナウイルスの感染予防対策が難しい理由の一つとして、“自身の感染リスクが下がると、予防行動への意欲が下がって気が緩むこと”が挙げられます。予防行動の減少・低下が再び感染症の拡大に繋がる引き金になります。また、重症化リスクが高いなどの事由で予防行動をとる動機の強い人（主として高齢者層）と、感染させる力が強いなど予防行動の感染拡大防止効果の高い人（主として若年層）が異なることが感染症のコントロールを困難にする一つの要因であります。したがって、重症化リスクの高い年齢層を守れるかどうかは、予防行動の感染拡大防止効果が高い若年層がカギを握っています。